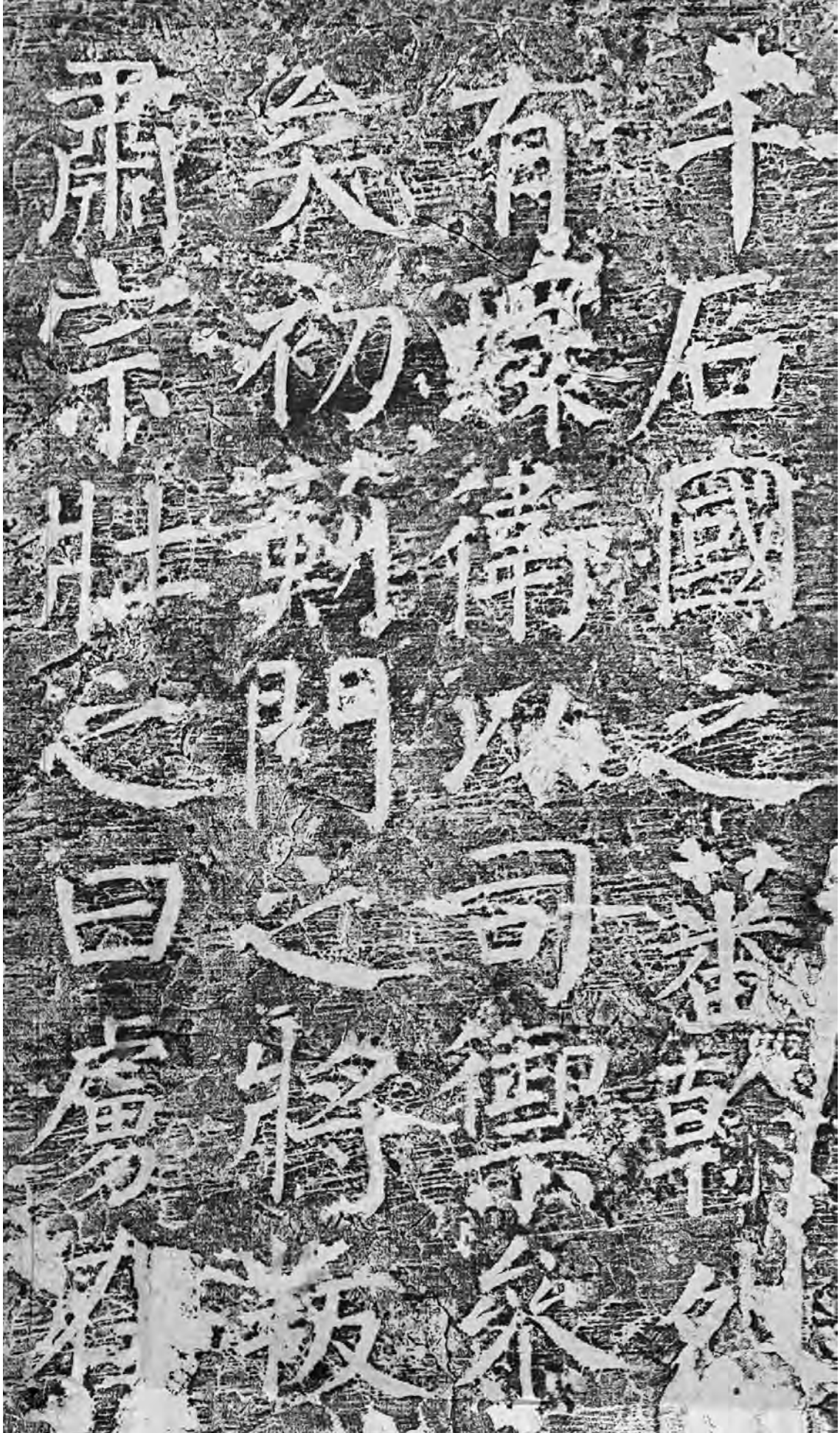
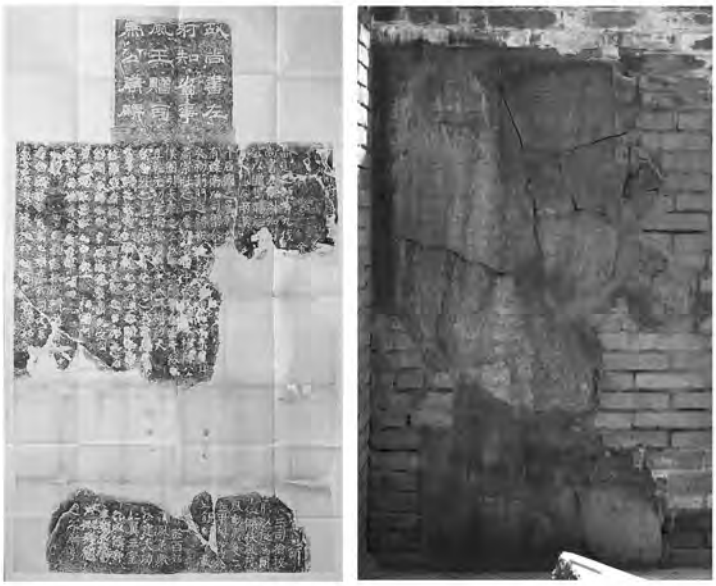


主図版①『馬璘新廟碑』（部分）

「顔真卿の書」⑤

馬璘新廟碑

唐・大歷十四年（779年）



図②『馬璘新廟碑』右・原石　左・整拓本

図③『馬璘新廟碑』部分比較

図④『馬璘新廟碑』碑額

多くの方は、『馬璘新廟碑』を初めて眼にされたのではなかろうか。展覧会でも、装幀された折帖が開示されてあっただけである。この碑の整拓本は、若い頃に入手し、顔真卿晩年の書と認識していた。西安の碑林博物館と合作の仕事をするようになり、親しくなった館員と博物館の事務所などの非公開区域を参観していたときに、『皇甫誕碑』の重刻が煉瓦壁に嵌め込まれているのに気が付いた。その近くに、この『馬璘新廟碑』を見出したときは驚いた（図②）。友人も最初は、これが顔真卿の碑刻だとは知らなかった。中国の方でも、この碑の原石を眼にした人は、稀であろう。博物館の裏の非公開区域には、多くの石碑や彫像が、展示されることもなく置かれている。家蔵の整拓本（図②）と、この壁に嵌め込まれたとき写した写真と比較すると、少し異なり、断裂痕が多くあり、所どころ文字が失われている（図③）。隷書の碑額は、ほぼ完全であり、碑文は上部が多く残り、下端は数十字が残るのみである。上部中央の比較的破損の少ない部分を、主図版で示した。『顔氏家廟碑』とほぼ同時期の作であり、書風は同じであるが、字画がやや細く明るい趣が感じられる。碑文は、程浩の撰、碑額の隷書（図④）は、唐の隷書の名手・韓擇木の子の韓秀實である。

この碑は、宋時代には歐陽修の『集古録』に記録されていたが、清朝の光緒十六年（1890年）に初めて出土し、残石五石に約四百餘字が見られるだけであったが、清末から現代にかけてまた破損したのであろうか。1947年碑林に移され、先の煉瓦壁に嵌め込まれたのであろうか。最近は、煉瓦壁から移され、博物館の文物倉庫に秘蔵されているとか。

伊藤滋（書斎名・木鶏室）

書道芸術院
令和の群像（2019）

高田幽玄

第72回書道芸術院展「石」　　高田幽玄書

「古人の求めし所を求めよ」

新元号に改まった記念すべき最初の号ですがよろしくと編集部からのご依頼でした。新しい酒は新しい革袋に盛れ、といいます。新しい時代にふさわしい新しい自分らしい現代詩文書に挑戦していきたいものです。

さて、書というのは私にとってはいわば宿命でした。戦時中、昭和の空海と称せられた上田桑鳩の内弟子だった父夢現の第一子として私は生まれました。幼少のころから筆を持たされ、大変厳しく躾けられたので筆を持つのが、親への反発もあって習字そのものがとても嫌でたまりませんでした。

進学の為、上京して一人の生活を始めてから、それまで遠ざかっていた書を無性に勉強したくなりました。父に思い切ってそれを打ち明けると、喜んでくれると思いきや、あっさり反対されました。書を専門的にやっても、本当の字が書けるとは限らない、というのがその理由でした。

大学に行き直し、教員免許を取って千葉県の公立高校の芸術科書道の教員になりましたが、本当に腰が据わったのは、平成元年父が亡くなってからでした。故村山元信（樸雲）先生のご紹介で種谷扇舟先生をご紹介いただきました。父の残した和光塾のこともあり、職を辞し田舎に帰りました。それからも度々扇舟先生には九州を尋ねていただき、ご指導をいただきました。必ず辻元大雲先生も同行されていました。

扇舟先生はある時スピーチされるのに芭蕉の言葉を引用されました。芭蕉の言葉に「古人の跡を求めず。古人の求めし所を求めよ。」とあるが、先人の「結果」や「やり方」を真似してばかりでは駄目だ。そうじゃなくその人がなぜそうしたのか、それによって何を求めようとしていたのか。その人の「想い」とか「志」を思うべきだ。本物はそこからしか生まれてこない、とおっしゃいました。

書を追求するにあたって臨書なしに考えられません。臨書にしてもただ形をのみ追っていては、いけない。その古典の奥に潜む本質を捉えねばなりません。その成立した時代、場所、思想、人格、など深く考察し、そして血肉となるまで繰り返して習熟すること。扇舟先生の教えは極めて普遍的で、これからも大切にしていきたいと思います。ましてや現代詩文書の「古典」はありません。私の作品はまだまだ未完成です。いずれにせよひたすら書くこと以外に道はないと思っております。

書のひろば

理事長　辻元大雲

第71回毎日書道展事務局発足

2月の運営委員会で組織が決定した毎日書道展は第71回展実施に向け4月11日、事務局合同会議を行った。

会議の前に総務副部長、審査副部長、陳列副部長会議もそれぞれ行われ、各部の運営細部につき実施要領が検討された。その後理事団も加わり全体会が開催され、実行委員長はじめ3部長挨拶、役員紹介の後審査部・総務部各部ごとの打ち合わせが行われた。

会議終了後懇親会が賑やかに行われ71回展の成功に向け大いに気勢を上げた会となった。書道芸術院の会員も多くの場面での活躍が期待されている。作品出品は勿論のことご協力ご支援をよろしくお願いしたい。

＊主要日程

・公募、会友作品搬入（未表装）
　5月13日～14日（15日篆刻・刻字）
・鑑別　5月24日～26日
・会員、審査会員書類搬入　6月18日
・入賞審査　6月28日～30日
・会員賞選考　7月3日
・文部科学大臣賞選考　7月4日
・会期などは既報参照
・表彰式、祝賀会　7月21日
・院関係出品者懇親会　7月21日

第47回日本の書展開催 東京展公募臨書も

全国書美術振興会主催の本展は本年47回目を迎え、関西展以降全国4地区で開催される。東京展では半切大による臨書作品が公募され入選作品が展示される。

・現代書壇巨匠　芸術院会員、芸術院賞受賞者以上を中心とする18名
・現代書壇代表108名　内、院関係（辻元大雲、下谷洋子、小竹石雲）
　以上全国巡回作家
・関西展　5月3日～5日
　マイドーム大阪
・中部展　6月4日～9日　愛知県美
・東京展　6月13日～23日　国立新美
・九州展　6月27日～7月2日　福岡
・東京展臨書488点入選
　院関係入選　30名　前後期陳列替
・会場　東京芸術劇場（池袋）
・日本側　新井光風、池田桂鳳、井茂圭洞、石飛博光、梅原清山、榎倉香邨、大井錦亭、尾崎蒼石、尾崎邑鵬、角元正燦、杭迫柏樹、黒田賢一、下谷洋子、高木厚人、高木聖雨、樽本樹邨、津金孝邦、土橋靖子、辻元大雲、仲川恭司、中野北溟、中村伸夫、船本芳雲、星弘道、真神巍堂、吉川蕉仙、吉川美恵子、綿引滔天
・中国側　欧陽中石、沈鵬、蘇士樹他

日中書法名家交流展2019開催

全国書美術振興会・中国国家画院書法篆刻院主催、全日本書道連盟・中国書法家協会共催による表記の書道展が急遽開催される運びとなった。書道美術新聞社を事務局とし、日中の書道界を代表する各30名が推薦され、一人3mの壁面が割り当てられ、全て軸装で発表する。東京展の後中国北京での開催が予定されているため輸送の関係で軸装が条件づけられた。

・東京展会期　5月8日～12日

全日本書道連盟助け合い募金 日赤と中国大使館へ寄贈

毎年恒例となった公益社団法人全日本書道連盟評議員以上の役員による助け合い募金の平成30年度分を、連盟星弘道理事長、辻元大雲事務局長が代表して4月4日、日本赤十字社の各種救済事業への支援として240万円、新しく着任された石永菁中国大使館文化担当参事官を通じて中国での社会事業振興に寄与する目的で100万円を寄贈。

日赤へ寄贈　星弘道理事長（中央）と

この助け合い募金運動は連盟の継続事業として長年続けられており、これまでの累積金額は1億円を超えており両機関からの感謝状を毎年いただいている。

毎日書道展70年史発刊へ

昨年70回の記念展を迎えた毎日書道展の記念事業の総仕上げともいうべき「毎日書道展70年の歩み」がこのほど完成、間もなく毎日書道展会員以上の方、関係機関へ届けられる予定。

10年前発行された「60年史」をベースにその後の10年間の記録をまとめたものである。60年史の記録は全てCDにその後の10年分を含め収録し、主に10年史、70回展記念事業の全貌、70年を振り返っての代表者による座談会などを印刷ベースで掲載し110頁余りとコンパクトにまとめられている。

本事業の実行委員長は辻元大雲、実行副委員長に中原志軒（奎星）、加藤有鄰（創玄）、委員として院から三浦鄭街ほか2名が担当の少数体制でのぞみ、毎日書道会の鈴木義典氏が主要事務を担当された。印刷は美術出版デザインセンターが担当。

会友、公募の方々には実費での購入をお願いする予定。詳細は後日発表される。

21世紀の書
―私の主張―

漢字㈠

最首翠風

何を書くか

〈承前〉「漢詩や漢文をその書材とすることは社会的に不適となることが考えられる。」と伊福部が書いてから半世紀経ている現在、相変わらず展覧会場は漢詩長文で占められている。

「読めないのは鑑賞者の責任」との意味もある。が、それでは益々〝書〟が一般人から孤立してしまうだろう。文字が書いてあれば読みたくなるのが人情だ。「書道は読めないから」と展覧会場入口で踵（きびす）を返す一般人を間々見かける。

日展に調和体が多く見られるようになったきっかけとして知られるのがあるエピソードだ。中国からの賓客を日展に案内した村上三島氏に、その客人の感想は「これは何処の国の展覧会ですか？」と揶揄したというのである。

あまりに主体性の乏しい日本の書道界の体質は今も変わっていないのかもしれない。日展や読売展に調和体は若干増えているが内容は漢詩の読み下し文や古典的な書材が殆どである。「毎日書道展」の漢字部が一、二類制に分けられ、大字系漢字作品が着目され始めたのは1986年、第38回からだった。

第67回書道芸術院展「無聲慟哭」　最首翠風書

現代詩文書㈠

大隅晃弘

書家の主体性

「書譜」に次のようにある。

私は、工夫を凝らした自信作が出来上がったので、名の知れた鑑識者にこれを見せたが、出来の良い部分には目を留めず、かえって失敗した部分を賞賛された。

（原文は割愛）

鑑識家に対する皮肉が込められながらも、書における作品批評の難しさを物語っているように思われる。

しかし、ここで注目したいのは、書が「書く」という書き手＝書家の主体的行為でありながら、「読まれ」・「評される」という受動的な立場をしっかりと意識している点にある。これは、素材である言葉が意味を持ち、その意味内容の伝達機能を「書」が担っているという側面があるからだろう。だが、書家の独創であるべき表現領域においての読み手＝鑑賞者に対する思慮は、表意性と表現性の複層構造を持つ書芸術独特の性質といえそうだ。書作に際しては、書家独自の表現を目指しながらも、鑑賞者に対して、言葉の意味内容を理解してもらえるような表記を心掛けることが必要ということだ。

しかし、過度な形で鑑賞者に寄り添うことには、書家の自由な表現活動において危険な兆しを感じずにはいられない。本来、表現者である書家には、「書きたいもの（素材）を自由に書く（表現する）」という主体性が保障されなければならないからだ。同時に、書におけるその本質は、根拠のない自分勝手な表現が許されることを意味しているわけではない。書家と素材の関係性について十分な自覚が意識されること、書家にとっての表現が創意工夫に充ちて必然的であるべきだ。

古典との関わりは大事だが、表層の雰囲気を撫でたような迫り方では物足りない。作品鑑別等で字形不全や可読性が指摘されることもあるが、字典中の奇怪な字形を得意顔で使うより、字典にない字形を字源に則って創作する意欲が必要だと思う。鑑賞者に安易に寄り添うことなく、書家の切実な独創性を表現するため、その根拠を日々積み重ねることが大事だ。

第35回 日本詩文書作家協会書展「夜の膚」（岬 多可子 詩より）　大隅晃弘書

第72回 書道芸術院展〈続〉

（併催 第70回記念全国学生書道展）

実行委員長
下谷洋子

第72回書道芸術院展（併催第70回記念全国学生書道展）については、平成30年3月10日開催の理事会に於いて、その大綱が次のように決定された。

○第72回書道芸術院展

1 会期　平成31年2月6日(水)～2月11日(祝)

2 会場　東京都美術館（上野公園内）

3 募集規定

ア 無鑑査、一般公募の部

・作品・書類搬入　平成30年12月3日

・鑑別・審査　平成30年12月15日・16日

イ 審査会員、審査会員候補の部

・書類搬入　平成31年1月18日

・作品搬入　平成31年1月27日

ウ 審査

・審査会員候補　平成31年1月28日

・審査会員　平成31年1月29日

4 作品解説会（都美術館）

・無鑑査・一般公募作品対象　平成31年2月6日

・「書道芸術院の書 漢字」出品17名の作品を中心として　平成31年2月9日

・第1室院役員作品・大作・上位入賞作品対象　平成31年2月11日

5 学生展表彰式（帝国ホテル）　平成31年2月10日

6 一般表彰式（帝国ホテル）　平成31年2月10日

7 祝賀懇親会（帝国ホテル）　平成31年2月10日

8 出品作品サイズ（単位㎝）

1 財団理事・監事

A 91×242　B 152×152　C 121×182

2 名誉会員・参与会員

財団評議員・参事・審査会員

D 61×242　E 79×182　F 85×176　G 106×136　H 121×121

3 審査会員候補

I 61×182　J 73×152　K 91×121　L 105×105

4 無鑑査

M 46×167　N 86×86

5 一般公募

書作品

O 35×136　P 25×167　Q 65×86　R 30×39　S 51×61　T 30×91　U 35×67.5

篆刻作品

刻字作品

9 一般公募出品料

1 30歳以上　7000円

2 30歳未満および70歳以上　3000円

（平成31年1月1日現在）

10 運営委員会

○運営委員長　辻元大雲

○運営委員　石井明子　板垣洞仙　稲垣小燕　尾形澄神　金井如水　川島舟錦　小竹石雲　後藤大峰　小浜大明　小林琴水　坂本素雪　下谷洋子　種谷萬城　千葉蒼玄　津田海仙　名越蒼竹　浜田堂光　高田幽玄　半田藤扇

11 実行委員長　下谷洋子

実行副委員長　小竹石雲　後藤大峰

12 事務局長　山口仙草

事務局次長　東福青篁

13 部長

総務部長　小島孝予

審査部長　千葉蒼玄

陳列部長　知野洛水

祝賀会部長　半田藤扇

会計担当　近藤尚子

○第70回記念全国学生書道展

1 出品規定

ア 出品資格

第1部　幼稚園、小学生

第2部　中学生

第3部　高校生

第4部　大学生、専門学校生

イ 部門　①半紙の部　②半切1/2の部、両部門に出品できる。

ウ 作品締め切り・搬入　平成30年10月17日

エ 審査　平成30年11月1日～4日

オ 褒賞　A個人賞　B団体賞

2 運営委員会

運営委員長　辻元大雲以下実行委員長、実行副委員長、陳列部長、会計担当、事務局長は院展、学生展共通。事務局次長　片岡豪峰

総務部長　菊池富美子

審査部長　名越蒼竹

表彰部長　三森慧香

揮毫部長　大平邑峰

3 審査役員

A賞審査員（6名）、A賞選考委員（9名）、中央審査員（19名）

4 指導者作品展示（135点）

ア 出品資格

・本展出品指導者

・「書道芸術学生版」指導者

・書道芸術院審査会員

イ 作品寸法

・半紙額内自由

○運営委員会

第72回書道芸術院展　運営委員会を平成30年6月16日　東神田事務所に於いて開催。

＊審査会員の作品について

褒賞　書道芸術院春華賞（1名）

選考は運営委員（財団理事・監事）が担当。（名誉会員、参与会員、選考委員、参事で過去の理事・監事経験者、過年度受賞者は対象外。）

春華賞候補作品には赤シールを添付し公表する。

＊審査会員候補の作品について

褒賞

書道芸術院大賞（1名）

書道芸術院準大賞

（各部を通して　5名）

白雪紅梅賞

（各部を通して　若干名）の他、同候補となった作品については昨年と同様「書道芸術院俊英賞」とする。

○選考委員は運営委員（財団理事・監事）が担当。

＊無鑑査作品について

褒賞

院賞、毎日新聞社賞、特選、秀作とする。

○審査員

漢字部主任・三浦鄭街はじめ12名。

かな部主任・勝山初美はじめ3名。

現代詩文書部主任・大隅晃弘はじめ11名。

篆刻・刻字部主任・佐藤香山はじめ2名。

前衛書部主任・大石仙岳はじめ6名。

○審査事務委員

漢字部主任飯田春香はじめ12名。

かな部主任・庄司紅邨はじめ2名。

現代詩文書部主任・武山櫻子はじめ11名。

篆刻・刻字部主任・丸山筑峰はじめ2名。

前衛書部主任・野口加奈はじめ6名。

＊一般公募作品について

褒賞

入選作品のなかから審査して、準特選、佳作、褒状を与える。

○審査員

漢字部主任・中尾琴麗はじめ12名。

かな部主任・平川峰子はじめ3名。

現代詩文書部主任・飯沼恵鳳はじめ11名。

篆刻・刻字部主任・小林古径はじめ2名。

前衛書部主任・一條紅蕭はじめ6名。

○審査事務委員

漢字部主任・朝倉希代子はじめ12名。

かな部主任・都丸みどりはじめ2名。

現代詩文書部主任・小池蹊舟はじめ11名。

篆刻・刻字部主任・津村紫幸はじめ2名。

前衛書部主任・柳町祥香はじめ6名。

○実行委員会

第72回書道芸術院展　実行委員会を平成30年6月16日　東神田事務所に於いて開催。

辻元大雲運営委員長はじめ実行委員長、実行副委員長2名、院展関係の各部長、全国学生書道展関係の各部長、事務局長・次長、会計担当等出席していただいた。

第72回院展、併催の第70回記念学生展についての部員と日程について確認した。

○第72回書道芸術院展　作品搬入

・一般公募出品数

608点昨年比26点減。

・無鑑査出品数

826点昨年と同数。

・審査会員候補出品数

711点昨年比30点減。

・審査会員出品数

527点昨年比9点減。

○鑑別・審査

一般公募と無鑑査作品の鑑別・審査が、平成30年12月15日、16日の両日、共和会館に於いて行われた。

○無鑑査に対する賞

院賞15点（漢6、かな1、現詩5、篆刻・刻字1、前衛2）毎日新聞社賞4点。　特選99点。秀作214点を決定。入賞率40％

○一般公募に対する賞

準特選42点（漢14、かな6、現詩13、篆刻・刻字1、前衛8）。佳作121点。褒状200点。入選245点を決定。入賞率60％

○審査会員候補に対する特別賞選考

平成31年1月28日　東京都美術館地下審査室で20名の選考委員によって行われた。

各部より10％の枠で賞候補を選考。更に1/2に絞り、全体の選考対象とする。選考委員の記名投票によって各部ごとの序列を決めた上で、漢字から前衛書部までの5部門のトップ作品を並べての最終投票。書道芸術院大賞に、漢字部・種谷悠輝（千葉県）さんが輝いた。さらに書道芸術院準大賞5点（か1、現詩1、前衛3）、白雪紅梅賞10点（漢5、現詩4、篆刻1）、書道芸術院俊英賞56点を決定。

○審査会員に対する書道芸術院春華賞選考

平成31年1月29日東京都美術館地下審査室で20名の選考委員によって行われた。

前日20％の賞候補を出し、当日1/2に絞って記名投票の結果、前衛書部・大石仙岳（富山県）さんが書道芸術院春華賞に輝いた。

○第70回記念全国学生書道展

第70回記念全国学生書道展には北海道から九州まで全国から作品が寄せられ、平成30年10月17日締め切った。出品点数は、半紙の部が13229点。半切1/2の部が2471点。

審査は平成30年11月1日～4日にかけて、名越蒼竹審査部長のもとA賞審査員6名、A賞選考委員9名、中央審査員19名によって行われた。優秀作品が多く、一作一作に時間をかけて審査。

その結果、全国学生書道展大賞に半紙の部5点、半切1/2の部3点、準大賞に半紙の部10点、半切1/2の部5点、第70回記念賞に半紙の部11点、半切1/2の部5点が選ばれた。なお、上位入賞者の作品と個人賞の氏名、団体賞については、第70回記念全国学生書道展成績表冊子に掲載された。都美術館では見応えのする作品が地区別に展示され見事であった。

また、優れた作品を沢山出品して下さった団体の中で、千葉県の「正華会」が4年連続全国優勝に輝いた。

○陳列部

2月5日、知野洛水・陳列部長のもと、院展、学生展、指導者作品展を含む計6150点という膨大な数の作品展示が順調に進み、予定通り記者会見を行うことができた。伊藤懐舟、見越雪枝副部長、陳列部員、お手伝い下さった方々、川端商会の皆様に感謝。

○記者会見

毎日新聞社ほか報道関係、評論家の方々にお集まりいただき、辻元大雲運営委員長より資料に基づき、第72回展の概要を説明し記者会見を行った。

○評論家の眼

大東文化大学教授・髙橋利郎様、東京国立博物館学芸企画部長・富田淳様のお二人に依頼、作品評価をいただい

た。直筆での寸評は作品脇に掲示し、さらに印刷して参観者にも配布した。高橋利郎の眼＝大隅晃弘、坂本大龍、須田瑞兆、善養寺紅風、真下京子の各氏。富田淳の眼＝菊田杏仙、木村香翠、須田瑞兆、土屋聖峰、の各氏。

○作品解説会

2月6日午後2時から無鑑査・公募上位入賞作品を対象に、展示会場に於いて当審査主任が担当し解説会を行った。また9日午後2時から「書道芸術院の書・漢字」展、出品17名の作品を中心に展示会場に於いて解説会を行った。

さらに2月11日正午から展示会場第1室に於いて役員作品・大作・春華賞作品などを中心に解説会を行った。

担当は漢字・小浜大明、かな・下谷洋子、現詩・小竹石雲、篆刻　刻字・後藤大峰、前衛・千葉蒼玄の各部の代表選考委員があたった。総評は辻元大雲運営委員長が行う。たくさんの方々が参加して下さり、賑わう解説会となった。

○全国学生書道展表彰式

平成31年2月10日表彰式に先立って午前10時より、学生展会場に於いて、学生展大賞受賞者、院役員代表による席上揮毫会を行った。大賞受賞者にふさわしい立派な揮毫会となった。

その後午後1時より、帝国ホテル富士の間に於いて、毎日新聞社事業本部総務・企画部長・三岡昭博様をお迎えして表彰式を挙行した。

表彰状の授与は、辻元大雲運営委員長はじめ財団理事、監事が務めた。毎日小学生新聞賞、毎日新聞社賞については三岡昭博様にお願いした。

帝国ホテルでの五回目の表彰式。片岡豪峰事務局次長の手配もよく、良い表彰式を挙行。菊池富美子総務部長、三森慧香表彰部長、大平邑峰揮毫部長の各氏に感謝。

○書道芸術院展表彰式

学生展表彰式に続いて同会場にて、書道芸術院展の表彰式が挙行された。

ご来賓は毎日書道会専務理事・西村修一様、顧問・香川倫子様をお迎えした。

春華賞、大賞、準大賞は、辻元大雲運営委員長より授与。以下の各賞については、財団の理事、監事によって授与。西村修一様には毎日新聞社賞の授与とともに激励のご祝辞をいただいた。

最後に受賞者を代表して、書道芸術院大賞に輝いた漢字部・種谷悠輝さんからの謝辞があった

○祝賀懇親会

院展表彰式終了後、17時30分から祝賀懇親会の開宴となる。

開会のことばは小竹石雲常務理事。続いて辻元大雲理事長により主催者のあいさつ。ご来賓のご祝辞は毎日新聞社取締役執行役員・広田勝己様、（公社）全日本書道連盟副理事長・田中節山様、（公財）全国書美術振興会前代表理事・名誉顧問・荒船清彦様よりいただいた。

乾杯は毎日書道会専務理事・西村修一様のご発声で開宴となる。

春華賞受賞者・大石仙岳さんはじめ、たくさんの受賞者の喜びの声や紹介が続き、ご来賓の方々との交流も賑やかな宴となる。

最後に、後藤大峰常務理事の閉会のことばで終了した。

○表彰式・祝賀会部

半田藤扇部長を中心に小島孝予総務部長他、委員の方々、事務局と総力をあげての手際の良さで盛況のうちに無事終了した。

○総務部

学生展、院展とも総務部は、書類搬入から作品搬入、整理、審査準備、表彰式、祝賀懇親会、撤回、搬出など、長期に亘りご苦労願った。

○審査部

学生展は名越蒼竹審査部長、一般は千葉蒼玄審査部長のもと、事務局、総務部との連携もよく、審査、事務処理ともに順調に進めていただいた。佐藤菜扇副部長はじめ委員の方々に感謝。

○会計部

会計部は学生展と第72回展の全てに亘り、膨大な予算を緻密な計算によって滞りなく処理していただき、事業終了後の残務も含め、近藤尚子担当に心から感謝。

○運営事務局

院展、学生展、運営の全てに関わり、膨大な事務局作業をコンピューターを駆使。事務処理担当の㈱リンクスとの連携を密にして進めていただいた。

各部の当番審査員並びに事務委員の人数割出に始まり、出品個票の出力、搬入統計の集計、賞の配分、審査結果の通知、陳列計画、出品者目録の作成、作品配置、祝賀会座席配置等々、総務、審査、陳列、祝賀会、会計とあらゆる部署と連携し事務処理に関わっていただいた。

山口仙草事務局長、東福青篁・片岡豪峰事務局次長のご労苦に対し、深く感謝申します。

表彰式

「漢字の書」作品解説会

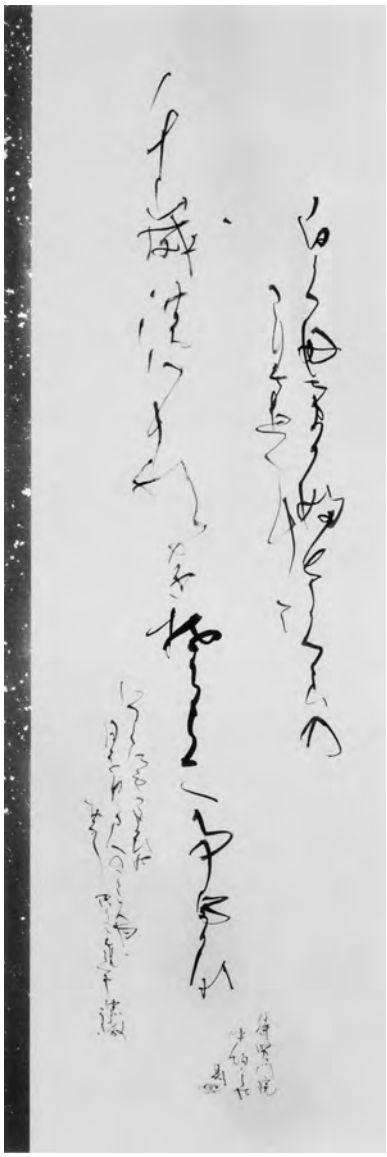
第50回 現代女流書100人展

同時開催＝現代女流書新進作家展（第70回毎日書道展会員賞受賞作家）

会期＝平成31年４月３日(水)～８日(月)

会場＝日本橋高島屋S.C本館　８階特設会場

主催＝毎日新聞社　後援＝(一財)毎日書道会



〈千歳の春〉

下谷洋子

182×61㎝

〈幸〉

香川倫子

73×75㎝

最首翠風

〈莞爾而笑〉　102×110㎝

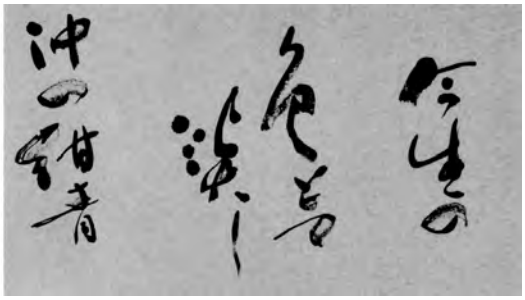
石井明子

〈道元のうた〉　72×135㎝

飯高和子

〈平成己亥・めぐりあい〈紺紙銀泥〉　68×57㎝×2

金木和子



〈無帽の帰還〉　34×62㎝×２

森　舞扇

〈百楽一生〉　53×132(上)／38×132(下)㎝

〈接〉

小林琴水

105×135㎝

〈光〉

崎井恵風

136×106㎝

〈比翼鳥〉

工藤永翠

183×61㎝

〈春影〉

滝　春芳

88×97㎝

〈皎月〉

福島李舟

182×79㎝

真下京子

〈つむがれた刻（ＴＳＵＭＵＧＡＲＥＴＡ Ｔｏｋｉ）〉

106×136㎝

【書道芸術院関係出品者】

顧問

（前）香川倫子

運営委員

（か）下谷洋子

100人展

（漢）最首翠風
（か）石井明子
（近）飯髙和子
金木和子
森舞扇
（大）小林琴水
崎井恵風
（前）工藤永翠
滝春芳
福島李舟
真下京子

新進作家展

（漢）岩垣若翠
（か）九條純代
（前）柳橋香仙

新進作家展

〈山櫻〉

九條純代

183×53㎝

〈禅語〉

岩垣若翠

178×58㎝

柳橋香仙

〈「志」による〉

75×157㎝

古典鑑賞

㊽ 魏霊蔵造像記　北魏 ②

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

〈解説〉龍門造像記は、北朝の位置した厳しい風土や時代性を反映して、素朴で剛健な書風を示している。魏霊蔵造像記も右肩上がりの字形、角張った筆使いの方筆による三角形をなす点、直線的な横画と縦画、転折の折り曲げるような書き方などに気迫と筆力の強さが表れている。龍門造像記の書は中国清代中期にいたりその真髄が注目された。数多く刻された造像記の中から書法として優れたものを選び、龍門四品・十品・二十品などとよんでいる。魏霊蔵造像記は、孫秋生造像記、始平公造像記・楊大眼造像記とともに「龍門四品」の一つに数えられる造像記の代表的な名品である。（編集部）

（掲載図版85％に縮小）

爰暨下代。茲容厥作。鉅鏞魏靈藏。河東薛法紹二人等。乖豪光東照之資。

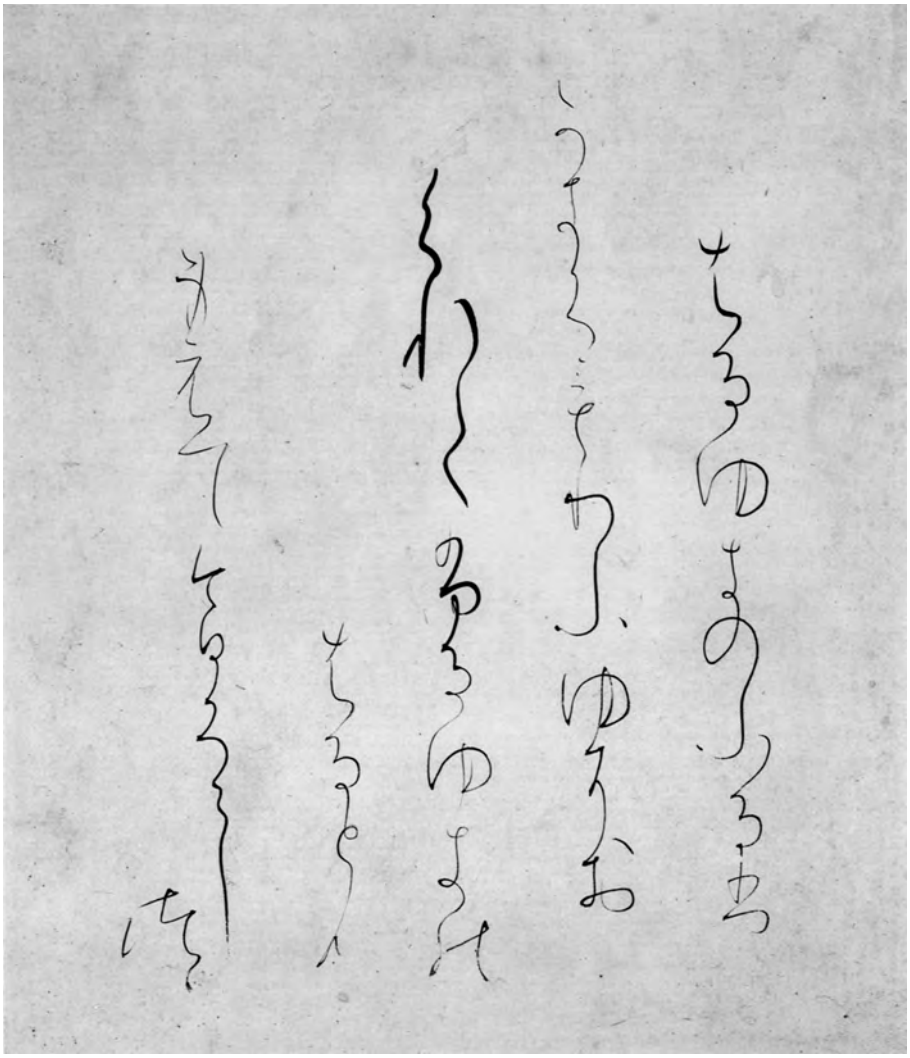
漢字研究部臨書課題	＝（半紙普通判・縦使用）上記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題	＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）当該古典の上記掲載部分以外も可。

古筆鑑賞

⑱②

升色紙（伝 藤原行成筆）②



（湯木美術館蔵）

〈よみ〉

はるゆきのふるひ
かきくもりふゆにお
くれてふるゆきの
はるとも
みえで今日くらし
つゝ

〈解説〉升色紙は、伝紀貫之筆〈寸松庵色紙〉、伝小野道風筆〈継色紙〉とともに「三色紙」といわれている。鋭利な穂先を使いこなした暢達した線、リズミカルな連綿、効果的な墨継ぎで余白の美しさが強調されている。さらに明るく穏やかな線とともにその散らし書きは変化に富み、さりげなく散らすもの、大胆に散らすもの、中には行を絡ませて文字を重ねて書くものなど、極めて巧妙な手法を見せている。筆者を藤原行成と伝えるが、その書風と料紙装飾からみて11世紀後半の書写と推定される。（編集部）

※掲載図版は原寸。

※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

かな研究部 臨書課題
（半紙普通判（**料紙可**）・**縦長**に使用）
別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。
上記の古筆の掲載の歌一首を書く。

特別研究部 臨書課題
（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）
上記の掲載以外も可。

漢字規定　初段以上【六月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判

種谷萬城選書

處處聞啼鳥　よみ（処処啼鳥を聞く）

書体＝自由

習い方解説 (二)

種谷萬城

處處聞啼鳥　孟浩然「春暁」
（処処啼鳥を聞く）

あちこちに鳥の声が聞こえる。今月は春暁の2句目を、宋・米芾を参考に、単体の行書で創作しました。全体を軽やかさで統一し、太細、大小、軽重、疎密、遅速の変化を少々加えました。左記の一作は、連綿の行書です。単体の行書で筆路をしっかり学び挑戦して下さい。行書は、東晋・王羲之が基礎ですが、唐宋元明清の歴代名家の作品があり、多彩な表現が鑑賞できます。幅広く学びましょう。

漢字規定　秀級以下　【六月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判

小竹石雲選書

重厚堅正　よみ（重厚堅正）

書体＝楷書

習い方解説（二）

小竹石雲

重厚堅正　（鄭珣瑜）
（重厚堅正）

おもおもしくして手厚く堅くして正しい。

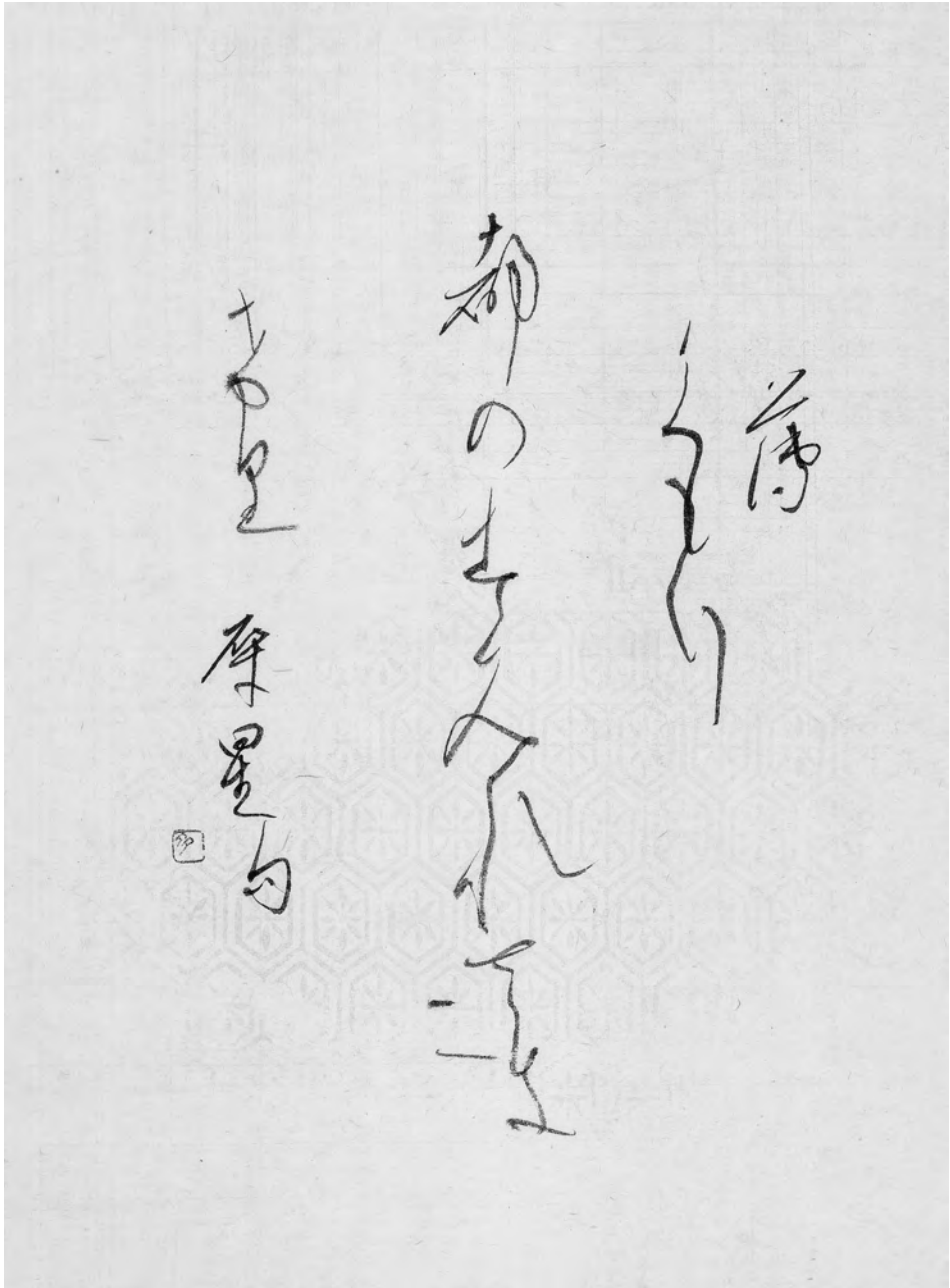
前回鍾繇を参考にしたので、その延長線上にある虞世南の「孔子廟堂碑」を参考にしました。唐代の整斉な楷書の代表的なものの一つです。そのなかで温雅で上品さにおいては群をぬいています。

注意点

・字形はやや縦長で向勢に
・のびやかな円勢
・中ふくらみの線で温かさを
・画と画は等間隔にし、整斉さを

以上のことに気をつけて書けば「孔子廟堂碑」に近づいてきます。ただ創作となると何かものたりなさもでてきます。初心者用と言うことですので、「孔子廟堂碑」の特徴である温雅を少し強調することで創作の足がかりとしてみました。潤いのある艶々とした瑞々しい線になるように、紙面の筆触に気をつけました。

かな規定　初段以上【六月十五日締めきり】　用紙　半紙普通判（料紙可）　大辻多希子　選書



よみ方　うす(薄)くもり都のす(春)みれさき(支)に(二)け(希)り(里)　犀星句　創作

習い方解説（二）

大辻多希子

うすぐもり都のすみれ咲きにけり
（室生犀星）

かな作品の美しさは、連綿や、散らし書きの工夫により表現されます。

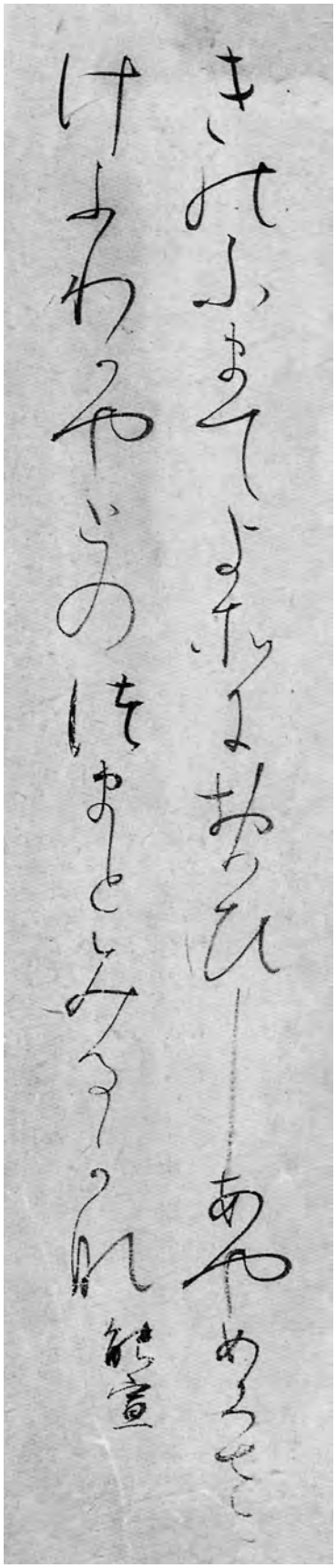
俳句は、短歌に比べ、文字数が少ないため半紙の紙面をどのように構成すると美しくなるか迷います。ひらがなや、漢語だけでは美しい作品にするのは不可能に近いと思います。

また、かなには変体がなを使用して表現できる方法があります。変体がなを取り入れることにより、大小・強弱の変化が生まれて、作品全体が引き締まったりもします。

またさらに、細くてもしなやかで強靭な曲線や直線を表現するためには、漢字の素養が欠かせません。幅広く深い学習をし、文字のリズムをつかむことが大切です。

かな規定　秀級以下　【六月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

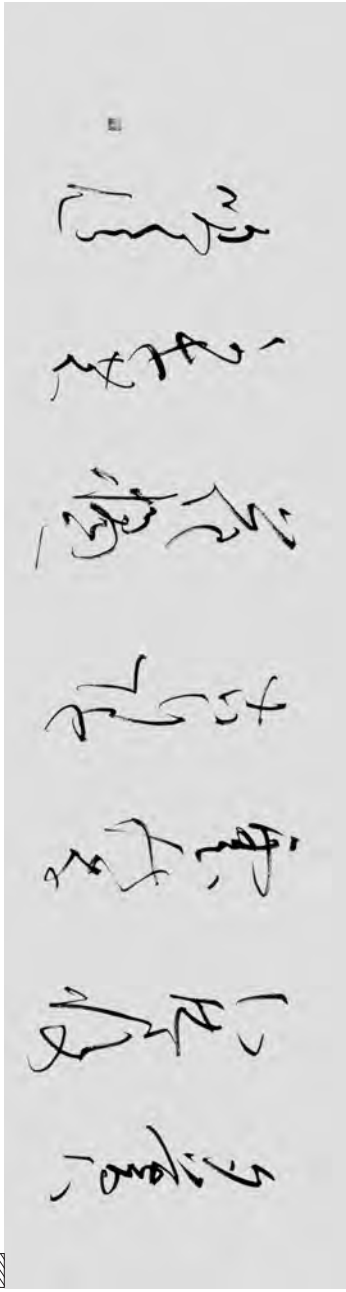
掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿）を臨書する。



粘葉本和漢朗詠集
（掲載写真拡大120％）

よみ方　きの(能)ふまでよそ(所)に(尓)おも(无)ひしあやめぐ(久)さ
けふわが(可)やどのつ(徒)まとみるか(可)な(那)能宣

かな条幅規定　**【六月十五日締めきり】**　用紙　小画仙紙半切（料紙可）



善養寺紅風選書

よみ方　夕暮は(八)いづ(徒)れの雲の(能)な(奈)ご(古)りとて
はな(花)たちばな(橘)に(二)風(可世)の(農)吹く(久)らむ(无)

創作

出品券貼付位置

習い方解説（二）

善養寺　紅　風

夕暮はいづれの雲のなごりとて
はなたちばなに風の吹くらむ
（藤原定家『新古今和歌集』）

横作品は、全体の流れがつかみにくく、縦作品より創るのに苦労します。その反面、縦にはない変化に富んだ表情が楽しめます。

「て」または「橘」あたりで墨継ぎをするのも良いでしょう。わかりやすい字を使いましたが、行が立ち過ぎぬよう留意して仕上げて下さい。

※ヨコ形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【六月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

名越蒼竹選書

隴山鸚鵡能言語　為報家人數寄書
（隴山鸚鵡能く言語す、為に報ぜよ家人數書を寄せと。）
（岑参詩）

書体＝自由

習い方解説（二）

名越蒼竹

行草作品では特に変化と流動性、そして全体の調和が大切です。流動性はどのようにして生まれるのでしょうか。それは字形のデフォルメと深い関係があります。一字だけでバランスを完結させるのではなく、敢えて一文字の安定性を壊すのです。まずは文字の中心線の垂直化と、上部と下部の水平化を避けるところから始めましょう。

※タテ形式に限る

漢字条幅規定　秀級以下【六月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

半田藤扇選書

鳥歌花舞
（鳥歌花舞）

書体＝自由

習い方解説（二）

半田藤扇

今月は、文字の画数が多いです。筆先に神経を使い、冴えた線が引けるように試みてください。

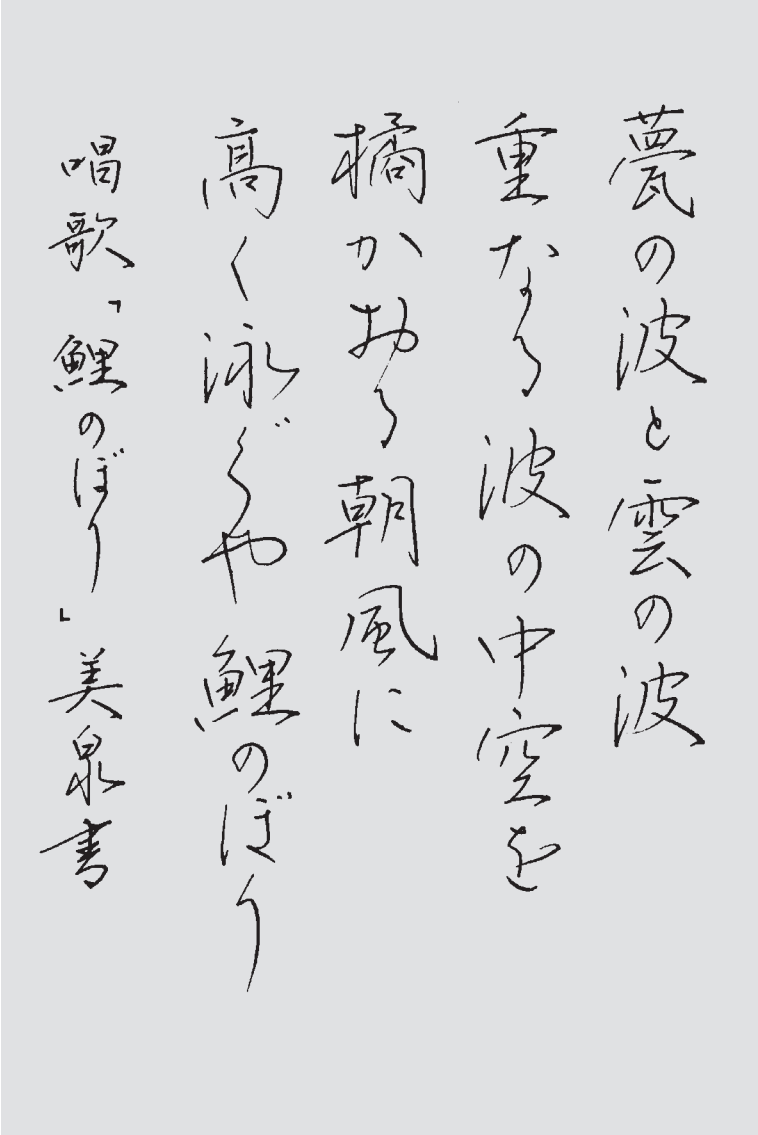
筆の開閉・緩急の変化、リズムにのって書作してみましょう。

4文字の一貫した流れを大切に。

※羊毛筆を使用しました。

ペン字規定【六月十五日締めきり】

川村美泉選書



用紙＝はがきの大きさ（14.8×10㎝）、白色のもの、黒インク使用のこと

書体＝自由

習い方解説（二）

川村美泉

真っ青な空の下、風にはためくフラフ、そして元気に泳ぐ鯉のぼり…子供の頃に見られたこの光景も、最近ではめったに見ることができなくなりました。時代の流れでしょうか。

五月より「令和」の時代となります。子ども達が心身ともに健やかで、希望に満ちた新時代を築いていけるよう願いを込めて書いてみましょう。

今回は漢字が多いですが、漢字の力強さとひらがなのしなやかさの調和を考えながら、ペンを進めてみてください。

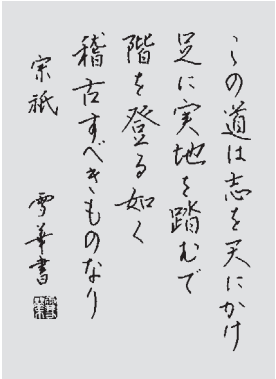
ペンの弾力を使い、緩急・抑揚など運筆の変化が出ると良いですね。

※落款（自分の名前）を必ず入れる。

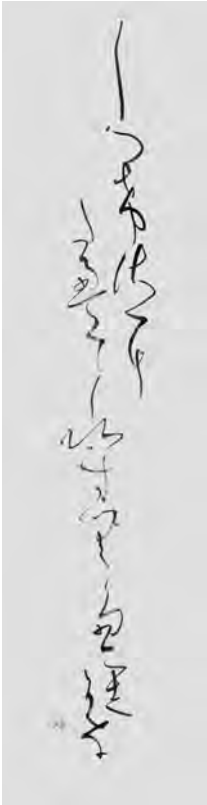
今月のホープ作品各部総評

NO.695

ペン字部　師範　権代　雪華
太く重量感のある筆致で魅力的。余白も美しく、格調高い見応えある作品。
◎ペン字部総評　字間・行間の配慮が窺えた。紙質を変えて意欲的な作品が数多くみられた。更なる発展を望む。（仙草評）

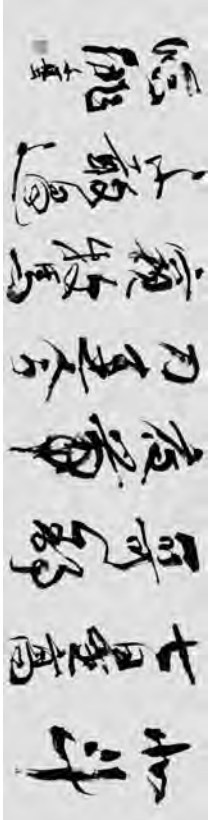


かな条幅部　五段　関口やよえ
強めの加工紙なので少々線が硬いが、よく筆が動きバランスよくまとめた。字形の変化も巧みで佳。
◎かな条幅部総評　今回は名前を入れて全体が整う形式でしたが、下部が無駄に空いた作が多かった。解説を熟読したい。（洋子評）

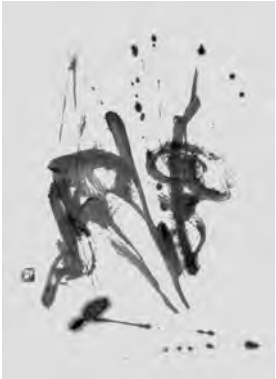


現代詩文書部　特選　松島　翠舟
線と空間の芸術が見事に表現されている。黒色も効果的に働き作品を際立たせている。木筆かな？
◎現代詩文書部総評　今月は全般に作品の質が高く特選から落とすことが辛かった。（素雪評）

漢字条幅部　師範　小林　舟驩
豪毛濃墨で強く明るい作品。筆端まで神経が届き余白も美しい。参考作品を基に独自の世界を展開。

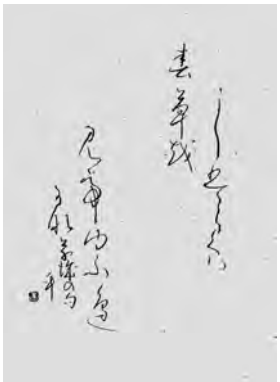


前衛書部　特選　工藤　山房
淡墨の味わい深い墨色を生かし、余白も美しい傑作。運筆もすばらしく爽快な作品に仕上がった。
◎前衛書部総評　自由な発想で、造形美を追求し、大胆に書の線をもっと楽しみましょう。（仙岳評）



◎漢字条幅部総評　横作品は特に紙面構成が難しい。単体作品は行間への配慮が惜しまれた。落款の不調和も。（翠風評）

かな部　師範　真下美佐代
句意への理解が深く、細太の変化の美しい動きで立体感ある独自の世界を生み出した力量は見事。
◎かな部総評　誤字少なく総じて上出来。落款印への配慮を欠くものが目立ち残念。かなに相応しい大きさを研究のこと。（明子評）



漢字部　師範　吉田　景燁
のびやかな運筆が紙面に動きを与え、潤渇の変化と共に味わいある作となった。
◎漢字部総評　上級5文字のバランスに一考を要する作多し。やや小ぶりにまとまり気迫に欠ける。下級楷書表現も同様。（大雲評）

今月の

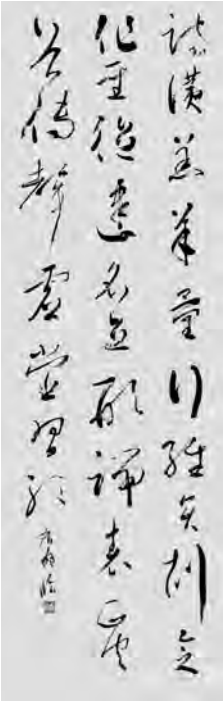
特別研究部優秀作品（特選）

選評　辻元大雲　三浦鄭街　平川峰子　倉林紅瑤

臨書（大雲）

宮原香扇

「草書千字文（千金帖）」



宮原香扇臨

175×55㎝

◆千金帖の滋味ある表情を、のびやかさを伴って明るくまとめた。余白の広がりが穏やかさを醸し出す。（大雲評）

◆2×6尺に3行の臨書作。行間を広くとり、柔らかな線質がよく調和し、味わい深い紙面を醸し出している。（紅瑤評）

◆懐素の独草体で表現の草書千字文（千金帖）。行間の余白が美しい。明るく穏やかで余裕を感じさせる作となった。（鄭街評）

◆字間、行間の余白が美しい。ふっくらとした線条に筆先の効いた細い線が字形を美しくしている。（峰子評）

前衛書（白珠）

工藤史音「舞」

工藤史音書

180×60㎝

◆濃墨によるエネルギッシュな筆致と潤渇の変化が魅力。空間処理が巧みで余白も美しく、紙面全体に緊張感が漲る快作。（紅瑤評）

◆書き出しのゆったりした運筆から最後の渇筆部分へ続く鋭く切れの良い線は見事。魅力的な作。（鄭街評）

◆大胆な運筆が紙面に勢いと気迫を感じさせて妙。二双紙の厚味をうまく生かし、濃厚な線が冴える。（大雲評）

◆墨の濃度と筆の速度が合致。上部から下部への流れが見事で、起承転結完成。（峰子評）

現代詩文書（大拙社）

畠中成山「海の響」

畠中成山書

70×135㎝

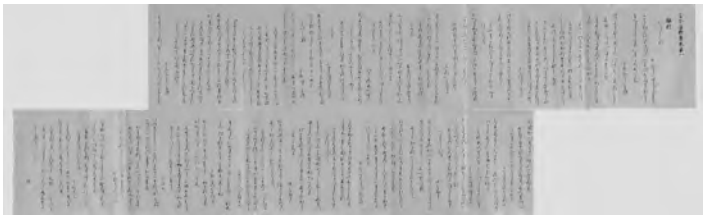
◆やや濁りを感じるが独特の青淡墨の潤渇が激しい情感を感じさせてくれる意欲作。下部細字に実力有。（大雲評）

◆少々荒い気はするが、上部の3文字と下部の細字が良くマッチし、大胆な構成が気持ち良い作品となる。（鄭街評）

◆上部3文字の字粒の大きさ、筆を上手く開かせて渇筆を作った工夫に感服。下部の細字が効果的。（峰子評）

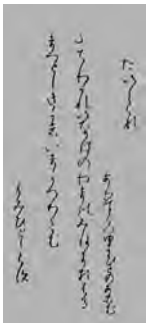
◆大胆な運筆で上部の大字部分と下部の小字部がよく呼応し、雄渾さあふれる堂々作。書学の深さが表出している。（紅瑤評）

臨書（清月）　境野和子「高野切第二種」



境野和子臨　53×178㎝

部分拡大



◆高野切第二種の特徴である紙に食い込む筆力、線の厚み、複雑な筆使いに努力のあとが見られる。（峰子評）

◆やや特徴を取りづらい高野切第二種のゆとりと滋味ある線質をよく表現している。気脈の通貫を買う。（大雲評）

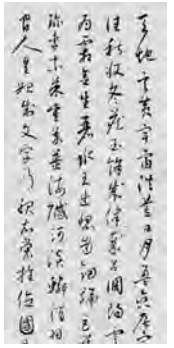
◆難度の高い高野切第二種に真摯に向き合い、古筆を忠実に臨書した努力作。もう少し墨量がほしい。（紅瑤評）

◆第二種の特徴である側筆を多用し、右肩上がりで肉太の字形を意識した作品になった。流れのある作。（鄭街評）

臨書（千葉）　竹浪叙舟「草書千字文」（千金帖）

竹浪叙舟臨　55×178㎝

部分拡大



◆原帖の細やかな情感をよく観察して見事。字間と行間のバランスも絶妙で全文を通貫させた努力に敬服。（大雲評）

◆千金帖を丁寧に全臨した努力作。上下の余白が狭く、少々窮屈な印象を持った。構成を良くし進化を。（鄭街評）

◆千金帖の柔らかな線質、平淡な美しさを丁寧に表現した全臨作。布置紙面全体に広がり過ぎ。一考を要す。（紅瑤評）

◆千文字を全臨することは並大抵なことではない。老練な域に達した神品と言われる千金帖の特徴をよく捉えている。（峰子評）

現代詩文書（宗苑社）
茂木絢水「谷川俊太郎の詩」

茂木絢水書　120×90㎝

◆柔らかな青淡墨の潤渇がリズムを生み、三連構成による余白が紙面に変化と動きを与えてくれる。（大雲評）

◆2行ずつの3連に分けた紙面構成が成功。「息をしている…」が6箇所あるが、変化をつけ工夫しているところが凄い。（峰子評）

◆墨色美しく、自然で温かみのある線で書いている。無理のない造形で格調高い作となった。（鄭街評）

◆何より墨色が美しい。淡墨の潤渇の変化を巧妙に盛り込み、紙面全体を表情豊かにまとめ上げた好感作。（紅瑤評）

総出品点数 66点

創作の部（41点）
漢字―8点
かな―2点
現代―12点
篆刻―0点
前衛―19点

臨書の部（25点）
漢字―22点
かな―3点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
もく 森田 藤谷
玄穹 千葉 紅雪
秀恵 阿部 雅悠

「現代詩」
麗澤 秋山 之扇
うる 今関 心華

「前衛」
蒼風 笹木 蒼風
青蓮 白河 真帆
蓮紅 大友 紅蓉
容州 阿部 邑里

（臨書の部）

「漢字」
紅瑤 金井みどり
英峰 佐藤 桂香
紅瑤 木暮 千晶

「かな」
千葉 猪又 理扇
千葉 平野 笛舟

漢字研究部
（草書千字文）

選評　小浜大明

今月のホープ作品

庄司咏艸

漢字研究部　特選　庄司咏艸

肥瘦、潤渇、緩急の変化を良く理解し、リズミカルな明るい表現が魅力の臨書作品です。又、無理のない自然の用筆も見事で、落ち着きと格調の高さを感じます。今後の書作に大いに生かされるものと期待いたします。

◎漢字研究部総評

草書体ということもあり、リズムにのった明快な作が多く見受けられました。力まず自然な用筆から生まれる品格あるこの作品は、筆使いのみならず、余白の美しさからも格調の高さが生まれるものと考えます。その点、文字の大きさや字間にも配慮が必要です。しかし、半紙いっぱいに大胆な運筆で書かれた作や、逆筆で筆を押し出して書いた作品も少なからずありました。又、「淬」字の誤字が多く目についたのも残念です。

杏華　桂子　篁右子　佳代子　叙孝　喜美代

遊玄山　喜代子　楊風城　蒼風子　美智代

雅恵悠　光栄子　順子　恵理子　京香

敦子　晴美　蘭花　岳舟　紅雨　良子

かな研究部
（高野切第二種）

選評　佐藤希雲

今月のホープ作品

松丸愛石

かな研究部　特選　松丸愛石

古筆と向き合って対話するかのように臨書しています。もう少し大きく書いて、実際の古筆のサイズと同じ位にするとさらによくなるでしょう。

◎かな研究部総評

課題は巻八の冒頭部でゆったりと謹厳な筆致で書かれています。臨書する時は筆を少し倒して持ってじっくり紙面を流していきますが、難しいようです。

美明日梢
山房夏

麻幹翠
生陽美

佳美智
子舟子

春雅惠
子泉汀

かな研究部成績表

特選

石愛丸松鷺加工加若正大石習華雲翠中明椿
菊竜紅千秀卯こう正華葉正大雲翠台翠
竜月泉瑤葉韻月る華葉華雲翠
紅菊竜紅千秀卯こう正華葉正大雲翠
瑤月泉瑤葉韻月る華葉華雲翠
蔦あ竹硯竜紅菊竜紅千秀卯こう正華葉正大雲翠
雲か美水泉瑤月泉瑤葉韻月る華葉華雲翠
青大弘玉青蔦あ竹硯竜紅菊竜紅千秀卯こう正華葉正大雲翠
運蓮舟松運雲か美水泉瑤月泉瑤葉韻月る華葉華雲翠
蔦あ竹硯竜紅菊竜紅千秀卯こう正華葉正大雲翠